



1946年生まれの菅沼緑（すがぬま・ろく）は、70年代から今日に至るまで、東京から岩手に拠点を移したとしても、最前線の現代美術作品を発表してきた。今回、展示された作品群を見れば、その業績を引くまでもないし、現代美術とは常に「いま、ここ」の状態にあるので、最新作が最もいいという問題ではなく、最新作も過去の作品も時空の概念を越えて我々に届いてくるのである。菅沼は今回、栗の木の塊を丸鑿盤で削り貫き、表面にアクリルで着色を施したシリーズ《シルエット 2013》を198点展示した。展示方法に綿密な計画はなく、恣意的に、感覚的に配置されている。作品を一つ一つ見ていくと、中途半端な形と着色に戸惑う。しかし作品群に取り囲まれていることを漫然と意識しない状態に自らを置くと、驚くべき事実を幾つも発見

することが可能となる。第一に、この作品群にはオリジナルがない。当たり前のものであっても重要な事項で、オリジナルがないためにヴァリエーションは存在せず、却って個々のオリジナリティーが強調される。第二に、個々のオリジナル性が強調されるとするならば、個々の形と色が消滅する。我々は常に比較を持って生きている。「赤い、四角い」と言っても、何に比べて「赤い、四角い」と無意識に探っている。この比較を徹底的に排除して作品に向き合うと個々が際立つのではなく、形と色という概念が消滅するのだ。作品タイトルがシルエット＝影であることが肯ける。すると個々の作品は、時代/場所という概念すらも飛び越えて、単独に存在することを理解していけるのだ。唯一の作品は消滅する。これが現代美術の特徴でもある。

